

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	聴覚・ろう重複センター藤			
○保護者評価実施期間	2025年10月27日		～	2025年11月14日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	22名	(回答者数)	9名
○従業者評価実施期間	2025年12月1日		～	2025年12月5日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4名	(回答者数)	4名
○事業者向け自己評価表作成日	2025年12月10日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	ろう・難聴児の受け入れに特化した事業所であり、かつ手話を中心としたコミュニケーション環境を保障している。また職員の中に聴覚障害当事者がいることにより、子どもたちへのロールモデルにもなっている。	職員・スタッフには常に手話を使うことで、子どもたちが情報が事業所内でどこでも目に入るようにしている。また写真やイラストなど視覚情報も増やし、音声に代わるインプットを意識している。	日本語と手話は別々の言語であることを認識したうえで、単に言葉の置き換えではなくそれぞれの単語や文の使い方を職員・スタッフが意識すると共に、子どもたちが自然に習得していける環境づくりに徹する。
2	同じ聾学校の生徒が中心ではあるが、学校では学年ごとの編成に対し、当事業所では異年齢交流の場となっている。年齢に関係なく交流することで双方の学びがある。	年上の子どもたちは自然にお兄さん役・お姉さん役を買って出て、下の子どもたちの世話をしている。また下の子どもたちは上の子どものやり取りを見て言葉を学ぶなどインプットがある。これは意識的ではなく、自然に行えていることである。この自然に行える環境を提供することが工夫面である。	社会的にはまだ少人数集団であるため、大集団での行動規範などを学習する機会を確保したい。
3			

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	家族支援の機会が少ない。必要に応じて家庭支援を行っているが、家族のためのファミリートレーニングなどのプログラム支援の必要性が問われている。	障害児本人への支援が中心になっている。職員・スタッフ間で役割分担して利用者支援と家族支援に分けて行えるような人員配置が出来ていない。	利用者支援あるいは家族支援(可能であれば両方)出来る人材育成に力を入れると共に、バランスよく支援業務を行える環境を整える。
2	動き回る部屋、大人しく活動する部屋と大きく2パターンの部屋が用意されているがクールダウンスペースなどパーソナルスペースが確保されていない。	子どもが感情的になった時などに一時的に落ち着けるスペースが必要なことを想定できていなかった。	簡易テントなどすぐに作れるパーソナルスペースを用意しておく。子どもたちが安心して落ち着ける空間を確保する。
3			